

山形大学附属図書館の紅花プロジェクト

－「紅花の歴史文化館」誕生記－

山形大学紅花プロジェクト実施ワーキンググループ

山形大学附属図書館が中心となって、学内プロジェクトとして、平成16年度から2カ年計画で実施した、紅花ポータル製作プロジェクトの経緯と成果について報告する。

I. 「1学部・部門1プロジェクト」

山形大学では、第1期中期計画として、「独創的・萌芽的研究テーマ（教育内容も含む。）を公募し、1学部（1部門）1件の採択・推進を図る。」と掲げている。

この「1学部・部門1プロジェクト」は、仙道富士郎学長のリーダーシップにより、『各部署等が教育・研究及び社会貢献活動に関して、現在取り組んでいるもの又は予定しているもののうち、他大学には見られない独創的又は先進的な取組みを全学で支援・推進し、本学の中期計画の達成を図ることを目的としたもの。』という方針で、平成16年度から開始された。（注1）

「紅花の歴史文化館」は、山形大学附属図書館及び山形大学附属博物館で所蔵する紅花関係資料を中心に、山形県内外の紅花関係機関の調査とデータベース化を図り、わかりやすく解説とともに情報発信する電子資料館です。

※平成16～17年度山形大学1学部1部門プロジェクト「紅花の歴史文化と地域学術資料のデータベース化及び情報発信」

2006年12月26日更新

紅花文書画像データベース	図書・雑誌全文	紅花資料目録データベース	標本・美術品・写真	紅花関係映像資料	その他
1.伊勢屋源助家文書 2.その他の文書	1.紅花関係図書一覧 2.紅花関係論文一覧 3.創作紅花料理レシピ集 4.紅花MAP	1.紅花文書目録検索 2.紅花文献目録検索 3.紅花インデックス検索	1.紅花関係絵図一覧 2.紅花関係標本等資料 3.紅花関係写真等資料	1.映像資料一覧	1.紅花の豆知識 2.総合学習の事例 3.紅花関連リンク集

WHAT'S NEW / 協力機関一覧 / サイトマップ W990-8560 山形県小市町一丁目4-10 TEL.023(620)4910 Email:ksbaku@ml.lj.yamagata-u.ac.jp Copyright 2005-2006 Yamagata University Library All Rights Reserved

「紅花の歴史文化館」トップページ

1. 附属図書館のプロジェクト

平成16年6月末に、「1学部・部門1プロジェクト」として全学への公募があったため、山形大学附属図書館は、同附属博物館（注2）と共同し、社会貢献を目的としたプロジェクト「紅花の歴史文化と地域学術資料のデータベース化及び情報発信」（通称「紅花プロジェクト」）を大学に申請した。

2. 概要及び目的

「紅花プロジェクト」は、2カ年計画とし、以下の目的・計画のもとに推進することにした。（以下、初年度の計画調書より抜粋。）

(1) 概要

紅花は山形県の県花であり、山形の歴史文化を語る際に欠かせない存在である。

紅花は、江戸時代に最上（現在の山形県村山地方）の商品作物として栽培され、「最上千駄」のこぼのとおり、最盛期には全国の生産量の50%以上を占めていた。（紅花1駄は120kgで、約50両、米100俵の価値があったといわれている。）

初夏の早朝に摘み取られた紅花はただちに煎餅状の紅花餅（はなもち）に加工され、最上川河岸の荷問屋まで馬で運び、川舟で酒田へ下り、酒田で北前船に積み替え、敦賀の湊を経て京都・大阪に運ばれた。紅花の花弁に含まれる色素は、化学染料のない当時、友禅染、口紅、顔料、薬に珍重され、上方文化の興隆を支えた。紅花を京都に運んだ船は、返り荷として生活必需品をはじめ多くの上方文化を最上にもたらした。このように、山形は東北と上方との中継商業の「商都」として繁栄し、全国各地との関係をもとに独特の地域文化が形成された。

附属図書館と附属博物館が所蔵する紅花文書をあわせるとその量は東北有数の地方文書群となり、紅花関係文書群としては日本一の質量を誇る。両館は共同して県内外の大学・関係機関と連携をはかり、歴史学・経済学・民俗学・芸術学・植物学・染色工学などの多角的な視点から紅花関係の古文書や美術品、標本を調査研究し、本県の歴史文化や地域特性の形成に関する資料情報の蓄積及び提供を計画する。

(2) 実施計画

両館所蔵資料のデータベース化及び情報発信、県内外の紅花関係文書の調査、両館所蔵未整理古文書の目録作成を行う。次年度に関係機関共同でシンポジウムを行う準備を進める。

(3) 期待される効果

山形大学を山形の歴史文化と地域特性の形成に関する情報センターとしてアピールする。山形大学が所蔵する東北有数の地方文書コレクションの価値を高め、地域研究者・市民による利用を活発化する。自治体や関係機関と連携し、地域文化の研究や町おこし・観光資源情報の開拓と蓄積を行い、それらの情報発信機関として附属図書館・附属博物館の機能を充実する。

3. 学内審査

学長と理事（5名）からなる審査委員会を経て、平成16年7月30日に「紅花プロジェクト」は2カ年計画（平成16年8月～平成18年3月）として採択され、初年度は3,000千円の事業費の配分を得た。（注3）

4. プロジェクトの実施体制

附属図書館長をプロジェクト代表者とし、実質的な検討・作業は、当初「附属図書館・附属博物館共同研究プロジェクト実施ワーキンググループ」（事業指導：岩田浩太郎・人文学部教授）で、準備も含めて平成16年6月からスタートした。メンバーは岩田教授のほか、附属図書館職員2名、附属博物館職員（学芸員資格を持つ）1名の計4名。その後、岩田教授にかわり、横山昭男・教育学部名誉教授の指導を仰ぐことになり、附属図書館職員の交替もあったが、2年目は附属図書館職員4名をメンバーとしたワーキンググループで作業を継続した。（注4）

附属博物館との共同は、「紅花プロジェクト」を企画・実施するうえで極めて大きな拠り所となった。附属博物館に地域史料として貴重な紅花関係資料・標本が所蔵されている

ことはもとより、「紅花プロジェクト」の電子資料館「紅花の歴史文化館」の主要なコンテンツとなった美術品等資料情報を、附属博物館職員のアドバイスや県内における博物館・美術館ネットワークを活用することなく入手することは困難であったからである。

II. 「紅花プロジェクト」の成果

1. 平成16年度の作業

2年計画の初年度である平成16年度（平成16年8月～平成17年3月）には、「多角的な視点から紅花関係の古文書や標本資料を調査研究し、山形県の歴史文化や地域特性の形成に関する資料情報の電子的な蓄積と提供を目的とし、これに基づいて日本の近世史等の教育研究や総合学習及び生涯学習に貢献する」こととした。

また、以下の3点を柱として作業を行った。

- ・附属図書館及び附属博物館の所蔵資料と山形県内の紅花関係情報の調査と電子化
- ・紅花関係資料をわかりやすい解説と共に情報発信する電子資料館「紅花の歴史文化館」の開設
- ・附属図書館及び附属博物館所蔵の未整理古文書の整理・目録化

その結果、平成16年度の具体的な成果として以下のことを実現した。

(1) 紅花関係資料の調査と電子化

- ・紅花関係資料の調査 10カ所
（山形県立図書館、山形県立博物館、山形美術館、山寺芭蕉記念館、河北町立中央図書館ほか。）
- ・紅花関係資料のデータベース化 8,908点
（文書、写真、標本、文献、動画、目録データ。）

(2) 附属図書館及び附属博物館所蔵の古文書の整理・目録化 6,356点

- ・二藤部文書 5,470点（附属図書館）
- ・小嶋家文書 886点（附属博物館）

(3) 「紅花の歴史文化館」の開設

平成16年10月に、山形大学附属図書館内の電子図書館サーバに、以下のコンテンツ及び検索システムを有する「紅花の歴史文化館」(URL: <http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/benibana/>) のプロトタイプを作成し、平成17年4月18日に公開した。(注5)

- ・電子コンテンツ
古文書画像、図書・雑誌全文、美術品・標本、写真、映像資料
- ・検索システム
古文書、文献。
- ・リンク集、紅花の豆知識、関係機関等一覧、サイトマップ

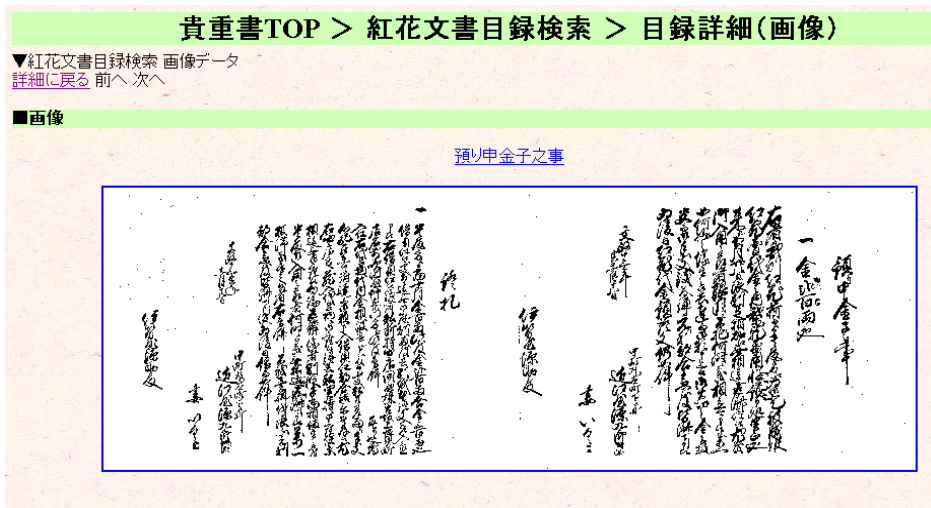
(4) 山形県内の関連機関との連携による充実したコンテンツの提供

- ・「紅花屏風」の高精細画像化
山形県の指定有形文化財である紅花屏風2点を、ZOOMA(注6)という表示用ソフトウェアを導入することにより、利用者がストレスなく画像の拡大・縮小・位置移

動などのブラウジングが自由にできるようにした。

・ 古文書画像

附属図書館所蔵伊勢屋源助家文書のうちの紅花関係文書108点の電子画像化を行った。



伊勢屋源助家文書

・ 紅花関係古文書目録・文献目録

伊勢屋源助家文書目録データ、二藤部文書目録データ(県立博物館所蔵分を含む)、山形県立図書館の山形県関係文献目録及び河北町立中央図書館紅花関係図書データの網羅的な検索を可能にした。

以上の作業により、各機関に分散している資料の横断的閲覧が可能となった。



紅花文献目録検索ページ

2. 平成17年度の作業

計画の最終年度である平成17年度（平成17年10月～平成18年3月）には、前年度を上回る3,300千円の事業費の配分を受けた。この金額は、全学で採択されたプロジェクト12件中4番目であった。（最高額4,000千円、最低額500千円）

平成17年度は以下の点を柱として作業を行った。

- ・平成16年度に構築した電子資料館「紅花の歴史文化館」の電子コンテンツを一層整備・充実する。
- ・本学の貴重な史料である紅花関係古文書について、劣化防止及び良好な保存のため、中性紙箱への保管を行う。
- ・本年度を当プロジェクトの完成年度と位置づけ、今後の社会連携の基盤とする。

平成17年度には、具体的に以下のような作業の成果があった。

(1) コンテンツの拡充

地域の生涯学習や総合学習に必須の紅花関係古文書・文献のほとんどは、一般的に閲覧や入手が難しい。本学名誉教授・横山昭男先生（歴史学）の指導のもと、基本的な史料・文献の選定を行い、著作権者の了解を得て、それらの電子画像をホームページから容易に閲覧・印刷できるようにした。

①附属図書館所蔵古文書の電子化

山形・大石田の代表的な舟持荷問屋である二藤部兵右衛門家の文書をはじめ、紅花の商取引、流通、村山地方の近世史研究に不可欠な以下の資料を電子化した。

文書名	点数	枚数
井山喜八家文書	2	6
二藤部文書	12	39
伊勢屋源助家文書	3	3
計	17	48

②紅花絵巻・最上川関係屏風等の高精細画像による電子化

昨年度に画像化した「紅花屏風」2点と並んで、代表的な紅花の芸術・民俗史料である青山永耕筆（一説）の「紅花絵巻」（個人所蔵、長さ775cm）の撮影フィルムを使って高精細画像化し、ZOOMAで鑑賞できるようにした。（注7）

また、古泉斎筆「松川舟運図（まつかわしゅううんず）屏風」（宮坂考古館所蔵）及び「最上川谷地押切渡より柏沢迄絵図（もがみがわやちおしきりわたしよりかしわぎわまでえず）（部分）」（致道博物館所蔵）についても、紅花の流通経路としての最上川の舟運史を考察するうえで欠かせない史料であるため、フィルムから高精細画像を作成し細部まで鑑賞できるようにした。



紅花絵巻

③研究論文、目録等の電子化

紅花史研究上の必読書である今田信一著「最上紅花史の研究」や、「最上紅花史料 1～3」(河北町刊)、山形県関係研究機関等の紅花研究の基本となる文献情報を、歴史・文化・経済・染色・医学・植物学等の各分野から選択し、電子化した。

また、今田信一氏の旧蔵書目録「藻鯨亭(そうねんてい)文庫目録」(河北町立中央図書館刊)についても同様に電子画像化し、「紅花の歴史文化館」で閲覧できるようにした。

平成17年度掲載図書・雑誌論文画像

点数	60点 (図書 18 雑誌論文 42)
ページ数	5,888ページ (モノクロ 5,790 カラー 98)

平成16年度分と合わせて図書19点、雑誌論文44点、計63点を掲載した。

紅花の歴史文化館
紅花関係図書

今田信一著『改訂 最上紅花史の研究』

今田信一著『改訂 最上紅花史の研究』(高陽堂書店, 1979)より。

全文を PDF 画像により読むことができます。下記リンクからご利用下さい。

- [表紙・序文・目次](#) (PDF 556 KB)
- p.3-24 序章 [最上紅花の概説](#) (PDF 1.12 MB)
- p.25-86 第一章 [生産高と品質の評価](#) (PDF 2.63 MB)
- p.87-175 第二章 [幕藩財政上の最上紅花](#) (PDF 3.83 MB)
- p.176-329 第三章 [紅花商人の成立と発展](#) (PDF 6.45 MB)
- p.331-410 第四章 [複雑な輸送慣行](#) (PDF 3.32 MB)
- p.411-512 第五章 [紅花流通機構改革運動の展開](#) (PDF 4.70 MB)
- p.513-552 第六章 [尚屋制度変化に伴う新事態の発生](#) (PDF 1.75 MB)
- p.553-590 第七章 [最上紅花衰退の原因](#) (PDF 1.81 MB)
- p.591-596 [結語](#) (PDF 229 KB)
- [索引・主要参考文献ほか](#) (PDF 1.06 MB)
- [あとがき・奥付](#) (PDF 43 KB)

[全体](#) (PDF 26.7 MB)

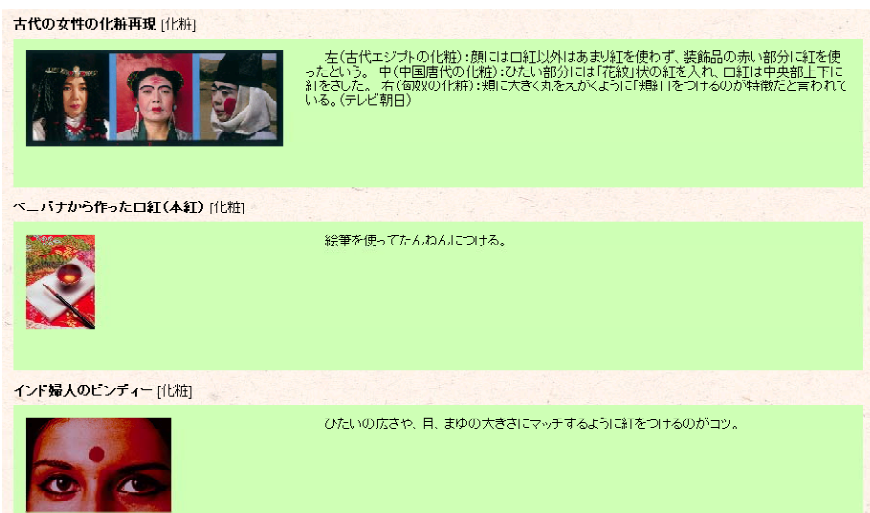
*この文献の掲載にあたっては今田達朗氏の許諾を得ています。

全文画像はPDF形式で提供しています。閲覧にはAdobe Reader等が必要です。リンクからダウンロードして下さい。

紅花関係図書ページ

④その他

- ・紅花関係写真等資料に370点追加し、497点とした。
- ・従来は学内限定配信であった既存の映像資料を、本学学術情報基盤センターの協力を得て、学外に配信した。
また、教育映画「紅花はいまー山形ー」（東北電力・東北映画制作、上映時間30分）を新たにストリーミング配信した。
- ・紅花観光情報である、「紅花探訪 山形県村山地方紅花 MAP」（山形県村山総合支庁発行）を高精細画像で掲載した。



紅花関係写真ページ

(2) システムの改善

コンピュータ周辺機器及びソフトを整備して、作業時間の短縮、大量データ処理、目録データ更新の自動化、「紅花の歴史文化館」の利便性を高めるための作業を行った。

(3) 紅花関係資料の収集・保存・利活用

本学未所蔵の紅花関係図書を収集するとともに、附属図書館所蔵の紅花関係古文書の適正な保存体制を整備した。

①紅花関係図書等の購入

「紅花読本」一粒社刊ほか本学未所蔵の紅花関係図書等を20点(21冊)購入し、紅花関係調査等の便を図った。

②所蔵古文書のマイクロ化

附属図書館所蔵古文書のうち、紅花に密接に関わりのある「山城国京都松下町最上屋井山喜八家文書」をマイクロフィルム化することにより、原史料の保存とマイクロ資料での利活用を図るため、国文学研究資料館・史料館に所蔵されている同文書マイクロフィルムの複製を作成した。(30リール、1万9604コマ)

③紅花関係古文書の保存対策

二藤部文書ほか古文書・和装本を収納する中性紙箱を購入し、酸化や劣化を最小限に抑えるための保管体制を整えた。

(4) 資料調査及びデータ入力

紅花に関する資料情報を網羅的に調査し文献データベースに集積した。

平成17年度末総件数、1,550件。

(5) 資料の解説作成

「紅花絵巻」、「松川舟運図屏風」、「最上川谷地押切渡より柏沢迄絵図（部分）」に平易な解説をつけた。

(6) 古文書リストのデータ入力

二藤部文書検索性データとして、文書リストから3,595点入力した。

また、目録未入力分として、二藤部文書目録手書き分161点と、山形市内の大商家・小嶋家の文書（附属博物館所蔵）1,047点（手書き分61点含む）も併せて入力した。

これにより、二藤部文書の全点（8,947点）を含め、計11,795点の所蔵情報を簡易に調べることができるようになり、村山地方等の近世経済史の研究支援環境が改善された。

(7) 伊勢屋源助家文書の読み下し文作成

学生や一般市民が古文書を理解するための参考情報として、読み下し文の作成を行った。古文書の原文画像と対比することで生涯学習等に活用されることが期待できる。

点数 108点

枚数 521枚

(8) 総合学習の事例ページ

紅花に関わる総合学習は、児童が地元の農家などとともに栽培や紅餅作り、染色を体験することにより、地域の自然や歴史を学ぶという点で大きな意味を含んでおり、これらの事例を紹介することにした。

なかでも、山形市立滝山小学校児童の個人新聞を電子画像化し掲載できたことは、大学図書館と小学校の連携という意味で貴重な例であった。



小学生の個人新聞

(9) その他

当プロジェクトは、平成17年度中にワーキンググループによる13回に及ぶ協議を重ねて実施した。

当プロジェクト初年度で「紅花の歴史文化館」の基本形ができていたために、その後の資料提供及びコンテンツ掲載許諾等の作業は比較的容易に行うことができた。とはいえ、掲載を断られた機関等もあり、著作権あるいはプライバシーの問題については、慎重になるとともに、当プロジェクトにおいてもっとも多くの期間と労力を費やした。

また、システムの基本的な機能は変えることなく、情報の鮮度を常に意識して9月末から月平均10回のペースでコンテンツを更新した。

3. 平成18年度の作業

当プロジェクトの予定計画年度を終了後も、通常業務の一環として現在までに以下の作業を行った。

(1) 紅花インデックス検索ページの作成

紅花に関するキーワードから、文献の該当ページを知るためのインデックス検索ページを設けた。本データベースに本文を掲載している文献については、章レベルでのリンクを張った。ただし、キーワード表示箇所に直接リンクするよう改善の余地がある。

平成18年末現在、文献数31件、キーワード数1,905件。

(2) 「紅花の道を探る」ページの作成

「紅花関係写真等資料」のなかに、全国で初めて紅花に限って原産地の調査を行った、山形新聞・山形放送の八大事業の一つ「紅花の道を探る」の海外調査レポートを、当時の新聞記事などを参考に作成した。

(3) 「ベニバナたんけんたい」ページの作成

「総合学習の事例」のなかに、小学校低学年用の紅花紹介文を作成した。

(4) 古文書関係解説の整備

「紅花文書目録検索」のなかに、二藤部兵右衛門家の解説を作成、小嶋源右衛門家文書の解説を電子化した。

(5) 掲載論文のHTML化

掲載済みのPDF版英文論文、和文論文それぞれ1点ずつ、HTML版を作成した。

(6) 文献データの更新

平成19年1月末の総件数、2,150件（17年度末以降、600件増）

III. コンテンツの掲載許諾作業について

「紅花の歴史文化館」の大きな特色の一つは、ウェブ上で提供しているコンテンツのほとんどが、他機関あるいは個人の著作物や所蔵品を電子化したものであることである。これは、紅花関係の資料が村山地方を中心に全県下に散在していること、また、「紅花プロジェクト」の当初の目的が社会貢献として県内外の大学・関係機関と連携をはかるということから必然であった。

自館の所蔵資料を電子化するのと異なり、電子化するための原資料、あるいはその複製物の借用と、電子化してホームページに掲載するうえでの承諾を得ることに、予想以上の期間と労力を要したので参考までに紹介したい。(注8)

「紅花の歴史文化館」の「プロジェクト協力機関等一覧」をご覧くださいとおわかりのように、交渉相手は多種多様であった。

交渉相手一人または1機関を1件とすると、

- | | |
|-----------|--------|
| a. 許諾依頼件数 | 52件 |
| 許諾件数 | 49(内数) |
| 個人 | 14(〃) |
| 県外 | 15(〃) |

掲載許諾の一般的な手順としては、

- (1) 事前に電話・メール等で内諾を得る。
- (2) 附属図書館長名で依頼文書(掲載許可書の書式同封)を送る。
- (3) 掲載許可書を返送していただいたら、必要に応じて写真等を拝借に伺い、預かり証を渡す。
- (4) 電子化後に写真等を返却する。
- (5) 掲載後に礼状等で連絡する。

という手順により、許諾作業を進めていった。

1. 掲載許諾作業の事例

この作業には、2年間を通じて図書館職員1名がほぼ専任で当たった。

平成17年度の場合、上記の作業に要した期間は通算(正月をはさんで)5カ月間であった。最も時間がかかったケースとして、依頼文書を送付してから3カ月半を要した例もある。

参考までに主な事例をあげる。

(1) 「紅花屏風」等の美術品の場合

「紅花の歴史文化館」の華である「紅花屏風」2点は、それぞれの所蔵館から撮影フィルムを拝借した。

「紅花絵巻」は個人所蔵であるが、所蔵者がたまたま元山形大学職員ということもあり掲載許諾は容易に運んだ。ただ、撮影フィルムについてはいくつかの機関に打診したが完全なものが得られず、独自に撮影するかあきらめるか、という時点で山形市内の最上義光歴史館が持っていることがわかり、なんとかか入手できた。(注9)

直接の交渉は図書館職員が行ったが、有形無形に附属博物館の力を借りた。撮影フィルムの入手は比較的順調にいったが、むしろ高精細画像を提供するための技術的問題や、ZOOMA化も含めた外注経費の問題に頭を悩ませた。最終的には、ZOOMAの期間限定使用権を購入して、フィルムのスキャニングからZOOMA化まで全ての工程を自前で行うことにした。

「松川舟運図屏風」は、所蔵者の宮坂考古館が博物館法上の施設ではあったが、館長が農家と兼業のため、連絡も含めて作業に手間取った。(注10)

また、「松川舟運図屏風」の撮影フィルムは、所蔵品カタログを作成する目的で撮影したものであるため、精度に難があるという意見も出たが、横山昭男先生の判断を仰いで掲載することにした。

「最上川谷地押切渡より柏沢迄絵図」の所蔵館(致道博物館)は、鶴岡市(山形市から北西に100キロ)にあるが、学芸員のはからいで郵送でお借りすることができた。

ただし、資料の全体を掲載する旨お願いしたのだが、許可をいただけず、部分掲載に

とどまったことは残念であった。

(2) 図書・雑誌論文の場合

平成16年度は、山形大学農学部名誉教授の渡部俊三先生の著書・論文を主体に電子化したので、許諾作業の労という点ではそれ程苦労しなかった。

平成17年度は、当初83点の文献を電子化する予定であったが、最終的には60点の電子化にとどまった。これは、横山昭男先生との打ち合わせの結果、一定水準以下の文献を除外したことや、掲載許諾を依頼したが断られたためである。

掲載許諾依頼したが、許可されなかった理由は三つある。

- ・著者及び当家のプライバシーに抵触する。
- ・出版者あるいは所蔵者側に著作権に関する規定がない。
- ・当該著作物を現在販売中である。

当プロジェクトの趣旨に賛同しつつも、ウェブ上での公開となると慎重になる傾向が見られた。

最終的に著者の許諾が得られたにも関わらず出版者の許諾が得られなかったために、職員が独自に原文献をOCRで読み、テキストとして校正した後、HTMLで再構成したものもある。

図書・雑誌論文データの大半は、河北町（雛とべに花の里）が関わるものであった。

さらに、資料によって同町役場と同町教育委員会とに所管が分かれたので、それぞれの担当部署に出向いて趣旨説明をした。なお、対象資料のなかには、現在販売中のものも含まれていたが、河北町には電子化を快諾していただいた。(注11)

その他、資料の中には既に著者が亡くなっており、遺族を捜し出して依頼したり、出版者のなかにも数十年前に廃業して連絡がつかないケースがあり、許諾確認作業の大変さをつくづく実感した。

(3) 映像資料の場合

山形県デジタルコンテンツ利用促進協議会から購入したもの4点(8番組)のほかに、東北電力株式会社から提供していただいたものがある。同社が無償で貸出サービスを行っている教育映画の一つ「紅花はいまー山形ー」は約30年前の作品ではあるが、紅花の芸術文化等を継承しようとする先人の苦労や意欲が伝わってくる秀作であり、特に県内の青少年に広く見てもらいたいことを東北電力の担当者にお話しし、制作会社の了解も得て、借用したVHSテープから図書館でデジタル変換したものである。(注12)

(4) 「総合学習の事例」の場合

小中学生向けの情報提供、特に総合的学習の時間に参考になる情報ということで検討を進めた。(注13)

「総合学習の事例」の個人新聞の掲載は、ある小学生からの一本の電話から始まった。平成17年12月某日、担当者に電話をしてきたのは山形市立滝山小学校6年の女子児童であった。「紅花のことを調べたいので図書館を利用させてほしい。」とのこと。数日後に児童数人が来館し資料を調べていった。年が明けて担当教諭と連絡をとり、調査の成果物として「個人新聞」を作ったことを知り、掲載許可をお願いした。個人新聞6枚は館内のスキャナーで電子化した。調査や発表会の写真の提供も、担当教諭を通して校長の許可をいただいた。

IV. まとめ

1. これからの課題

- (1) コンテンツが充実したことにより、研究者のみならず山形県の歴史・文化を学ぶ人々の生涯学習等に活用される環境が整ったといえる。今後は、研究・学習の現場と連携して、さらにコンテンツの充実と利便性を高める必要がある。
- (2) 山形県工業技術センターでは、平成18年度から紅花振興のための研究・製品開発プロジェクトを実施しており、本学工学部物質工学科とも連携している。こうした動きに対応し、将来に向けて紅花の有用性を高めていくためのバックアップ、さらには、世界に向けての広報を行う体制を備える必要があり、附属図書館の基幹的業務とのバランスで考慮する必要がある。
- (3) 滝山小学校の事例でもわかるように、「紅花の歴史文化館」という電子的な枠組みを超えて、大学が活用され、大きな教育効果を発揮することができる。今後は、市内高等学校も含めた学習活動の窓口となるよう連携を深めていき、学習の場としての本学図書館施設・サービスの活用を定着させていく必要がある。
- (4) ウェブ上での紅花百科事典（仮称）の構築については、現在掲載されている文献原文情報のテキスト化など、今後の利用の動向や利用者の要望を踏まえて、別途予算措置するなどして対応する必要がある。

2. 最後に

紅花プロジェクトは、当初から学内外の好意的な評価や期待を受けながら推進することができた。（注14）

内容的にも最終年度で大幅なコンテンツの充実がなされ、使い勝手も向上した。今や、紅花の情報源（ウェブサイト）としては世界屈指となり、月平均700件以上（最大約900件）のアクセスがあるとともに、「紅花の歴史文化館」公開後数ヶ月で具体的な活用事例も出てきている。本学農学部OBであり、（株）フタバ中央研究所研究員渡邊毅巳氏からは、「食用、薬用、化粧品、飼料、切り花と多岐に渡る利用が可能なベニバナは、減反休耕田の転用作物の候補にもなりうるのではないか。価値ある植物ベニバナの研究の一翼を担うであろう『紅花の歴史文化館』の発展を期待する。」と、コメントをいただいたうえに、文献情報の提供もいただいている。

このように、当プロジェクトは単に紅花に関する文献を整理したり、電子画像化しただけでなく、その過程で約50の関係者・機関と友好的な繋がりを持った（「紅花の歴史文化館」プロジェクト協力機関等一覧参照）。実際に訪問した関係者・機関は約20箇所へのぼる。郷土を、紅花を愛するこの人的ネットワークを含めて、当プロジェクトの意義があるといえる。

今後、情報の発信と集約をさらに着実に積み重ねていきたいと考えている。

末筆ではあるが、当プロジェクトに快く協力してくださった河北町、東北大学附属図書館ほかの皆さまに深く感謝を申し上げます。

（文責：佐藤尚武）

注

- (1) 従来の学長裁量経費の配分方法を見直し、部局からの公募により、各部局の企画力・提案の独創性等を客観的に審査することにより、予算額を決定するシステムである。
- (2) 附属博物館は、附属図書館の施設内に置かれているほか、附属博物館の庶務を学術情報部学術情報ユニット（当時の名称は附属図書館情報管理課）が所掌するなど、日常的に緊密なつながりを有している。
- (3) 審査委員会からは、「山形特産の紅花に関する歴史文化史料のデータベース化は、地

域文化向上への貢献として大いに期待できる。」との評価をいただいた。

(4) 山形大学紅花プロジェクト実施ワーキンググループメンバー（五十音順）

- ・石山博子 平成16年6月～17年3月（情報サービス課閲覧係長）
 - ・加藤信哉 平成16年10月～17年3月（情報管理課長）
 - ・佐藤亜紀 平成17年9月～18年3月
（情報管理課目録情報係員、1月から工学部分館図書係員）
 - ・佐藤尚武 平成16年6月～18年3月（情報サービス課長）
 - ・高橋加津美 平成16年6月～17年3月（附属博物館係員）
 - ・日出 弘 平成17年9月～18年3月（情報管理課課長補佐）
 - ・山田俊幸 平成16年10月～18年3月（情報サービス課学術情報係員）
- （事業指導：岩田浩太郎教授、横山昭男名誉教授）

(5) ソフトウェアは、オープンソースであるApache（Webサーバソフト）、MySQL（データベース管理システム）、PHP（データ処理プログラム）により構成し、検索システムとして東北大学附属図書館から「和算ポータル」プログラムの使用許諾を得て移植した。

(6) ZOOMA：ドリームテクノロジーズ社の製品。高解像度の画像データを画質を落とすことなくWeb配信することが可能で、PC側でも無段階で画像を拡大・縮小・スクロールさせて閲覧することができる。

(7) パソコン画面で美術品を鑑賞するのは邪道と知りつつ、できるだけ現物の色彩を再現するよう心がけた。紅花屏風などの撮影フィルム（屏風は一点につき6枚、絵巻は12枚に分割撮影されていた。）をスキャナーで取り込み、電子画像にして接合したが、フィルムの変形、汚れ、傷、各フィルム間での色彩の違いへの対応などに時間を要した。

(8) 著作権法第83条によると、出版物の場合、「著作権は、出版後3年経過後に消滅する」とあるが、当プロジェクトでは、ウェブ上での公開ということもあり、念のため出版者の許諾もいただいた。

(9) 代表的な美術品である「紅花屏風」2点と「紅花絵巻」は、山形美術館等で過去に何度か別々に展示されたことはあるが、3点が同時に展示されたのは「紅花の歴史文化館」が初となった。

(10) 休日に、山形市から南に約50キロ離れた米沢市まで職員が出向いて撮影フィルムをお借りした。

(11) 河北町教育委員会発行の「紅花資料館 よみがえる紅花（くれない）」については、現在英訳作業が進行中である。

(12) 映像データは、本学学術情報基盤センター米沢分室ストリーミングサーバに搭載してもらった。

(13) 地元の農家が協力して紅花学習を行っている山形市立出羽小学校の学習発表会を見学したこともあった。また、徳島県立総合教育センターで、紅花の児童向けデジタル学習教材を作成する話があったが、結局実現に至らず、コンテンツに加えられなかったのは残念であった。

(14) 学内の評価としては、学長から高い評価を受けたとともに、平成17年6月のプロジェクト成果報告会において評価担当理事から、「これまでも紅花が山形文化の歴史的な一つを中心だったはずなので、色々な方がそれぞれの立場で研究を進めて来られたと思う。このデータベースができたことにより、研究面で大きく前進し、組織的研究が始まって、紅花研究の総体が見えてくるような研究に繋がればよい。山形大学としての発信を是非続けてもらいたい。」との講評をいただいた。